
幻想迷宮

雪兎

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想迷宮

【Nコード】

N4759Y

【作者名】

雪兎

【あらすじ】

羽歩木苺は異世界の少女、遙か遠い昔の出来事から運命に翻弄される少女だが、その鎖を断ち切るために仲間と助け合いながら立ち向かうお話。神に愛された少女シリーズの始まりの少女の話。まったり更新

ブローグ

今から遙か遠い昔、ディグドールという世界にある月光村つきひかりむらに月星つきほしという少女がいた。

月星は生まれた時に鍵を持っていた。村の人々は不思議に思ったが、その時は自分たちに害

がないと判断し、そのまま鍵も月星の事も深くは考えなかった。

しかし、その鍵は普通の鍵ではなく異質な力を秘めた謎の物質だった。

そのことが判明したのは五歳になった月星が引いた風邪が原因だった。

子供の間でも流行っていたため、月星も当然風邪をひいた。小さな子供たちは、熱がでて弱っていると、ティクル・・・自分のずば抜けた特技、あるいは魔法や魔力と言われている力

が暴走する。暴走するといってもそんな大層なものではなく、使う力が多く出過ぎるだけで

ある。大抵の子は二歳くらい、遅くても四歳には自分のティクルが把握出来てるが月星はティクルが使えなかった。周りからは無能

者のレッテルを張られた月星だが、熱を出したとき

に力が暴走した。何の力かは分からない。だが、力を使った事がな

いそして制御できなかったという結果、村を半壊させた。

村人たちは必至で止めようとしたが出来なかったのだ・・・いや、出来るはずがなかったんだ・・・

だって、今まで無能というレッテルを貼られていた少女とは・・・そう、小さな少女の力とは思えない力だったから。

無能者と言われていた月星だが、何らかの原因で月星のティクルは使えないようになっていただけであり

そして、月星の持っている鍵はとてつもない力を秘めていた。

それは道具ではなく、月星の一部として機能しているものであった。

それからというもの、月星は村の人々から虐めを受けた・・・

力を使えるようにはなったものの、生れてきたときに生えてた左翼がしまえなくなりずつとはえている状態。

「化け物!」「ばけもの!」「バケモノ!」

月星が八歳になるまでの三年間、暴力と罵詈雑言の嵐は止まなかった・・・

月星が八歳になると村から隔離されるかのように村のはずれにある森の奥深くの牢、鳥籠のような折りに閉じ込められた。

月星は自分を恨んだ村の人たちのことを恨まず、両親に肩身の狭い思いをさせてしまったことを悔やみながら数年の年月を鳥籠の中で

過ごした。

数年がたったある日、月星は16歳になった。周りが驚くほどの美人に成長していた。

そしてその数日後に月星は消えた。消えたというよりも鳥籠のなかからいなくなっていたのが。

そのことを知りあわてたのは村長とお付きの数人、村人たちは安心していった。

月星が消えた頃三人の四人の子供が村からいなくなった……

これは過去の話、これからの出来事と関わる始まりの話。

そうして回り始めた歯車

一話

水が流れてる……

大きい音の割に静かな滝……

檻の中の私……

森の奥深く

降り注ぐ月光

どうして？

どうして私はここにいるの？

綺麗な満月……でもとても冷たい

ここはどこ？私は……？

……そこで目が覚めた

「ピピピピ」

目覚ましが鳴った。

まだ覚醒しきれてない頭で私はさっきまで見てた夢について考えた。

ひどく懐かしかった……

悲しいほどに辛い、そして懐かしい……

考えてると

「ピンポーン」

インターホンが鳴った。

朝早くからインターホンがなるなんて……嫌な予感しかない。

少女が出ないからか、今度は連打で鳴り始めた。

「はぁ……」

少女がため息をつき部屋を出ようとすると窓が開いた。

「木苺ー！おっはよー！」

窓から少女が入ってきた。

「とわ……おはよう！じゃ……」

木苺と呼ばれた少女は思いつきり息を吸って

「ないでしょ？！」

と叫んだ、木苺さん叫びました。

「今何時だと思ってるの？それにいつになったら窓から入ってくるのやめるの？！」

時計をつきだす木苺。

「木苺起きてるからいいじゃん。だって窓から入る方が楽なんだもん。それに私……」

深刻そうな顔をするわ。

「ど、どうしたの？」

木苺が心配すると

「アナログ時計読めないんだ」

「……はあ？！」

陽気な声で小学生みたいな事をいい始めた。

啞然とするる木苺。

「ねえ、学校遅刻するよ？」

「私今起きたばかりなんだけど。」

「お腹すいた」

「今まだ五時半前なんだけど。」

「眠い」

話を聞かないとわ。

「人の話を聞けー！」

「いいから学校行こうよ！」

木苺の話をまったく聞かないとわ。

木苺は呆れながら

「着替えるから……外で待ってて。」

とこめかみを押さえながら、窓コアラとわを放り出した。

・・10分後・・

「おまたせ・・・」

朝から疲れ切った木苺。

「遅いー！」

「遅いつてあんたが早すぎるの！」

とわと木苺が言いあつてると、

「ふわぁ・・・馬鹿とわのせいでねみい・・・」

二人の少年がそばに来た。

「七音、大口開けるな馬鹿面が更に馬鹿に見える。」

「うつせ、馬鹿とわ阿呆とわ。」

口げんかを始めるとわと七音。

「ほら、二人とも近所迷惑だから落ち付けって。」

「だって、馬鹿とわが悪いんだぜ？奏汰は馬鹿の味方なのか？！」

奏汰と呼ばれた少年は

「安心しろ七音、お前も十分馬鹿だ。」

と真顔で言い切った。

「あたし達が呼びに行くまでいつも起きないくせに！」

「まあまあ取り敢えず行こうよ、学校開いてるかどうかわかんない

けど。」

「確実に開いてないだろな。」

「やっぱりそうよね・・・」

そして木苺と奏汰は同時にため息をついた。

一話（後書き）

主人公は木苺こと羽歩木苺^{はねほきいちい}で

出てきたキャラのフルネームは

時空とわ（ときぞら）

苗木七音^{なえぎななと}

咲崎奏汰^{さきさきかなた}

です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4759y/>

幻想迷宮

2011年11月17日18時13分発行